

公益財団法人 日本骨髄バンク 第71回 業務執行会議 議事録

開催方法：コロナ禍の影響により WEB 会議形式で開催

(本会議を WEB 開催することに関して全理事の同意を得た)

日 時：2020 年（令和 2 年）10 月 9 日（金）17:30～18:35

出 席：小寺 良尚（理事長）、加藤 俊一（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）
浅野 史郎（理事）、大久保 英彦（同）、金森 平和（同）、鈴木 利治（同）
高梨 美乃子（同）、橋本 明子（同）、小野 高史（監事）、相村 岳央（同）

欠 席：高橋 聡（理事）、谷口 修一（同）

事務局：五月女 忠雄（事務局長）、渡邊 善久（総務部長）、小島 勝（広報渉外部長）
小川 みどり（移植調整部長 兼 新規事業部長）、折原 勝己（ドナーコーディネート部長）
竹村 肇（総務部）、上原 淳（総務部）
順不同、敬称略

1) 開会

開会にあたり小寺理事長が挨拶した。

2) 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第 6 条により本業務執行会議が成立した。

3) 議長選出

業務執行会議運営規則第 5 条により業務執行会議の議長は理事長があたるとされ、小寺理事長が議長に選出された。

4) 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は、業務執行会議運営規則第 8 条により議長と出席した副理事長が記名押印する。小寺理事長と加藤副理事長、佐藤副理事長がこれに当たるとされた。

5) 議事録確認

前回（2020 年 9 月 11 日）の業務執行会議議事録案を全会一致で了承した。

[議 事]

6) 報告事項（敬称略）

(1) 骨髄バンク推進月間の状況報告

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

毎年 10 月の「骨髄バンク推進月間」に合わせて様々なイベント等が行われている。主な取り組みを紹介する。1 つ目は政府広報オンラインである。「命をつなぐ骨髄バンク」と題してネットで骨髄移植の流れが紹介されている。また BS-TBS では「霞が関情報チェック」という番組（2020 年 9 月 27 日）で岡本真一郎先生（当法人国際委員長）と厚生労働省の田中彰子室長が出演した。2 つ目は広島県である。ボランティア団体の「ひろ

しまドナーバンク」が軸となり広島国際大学、山陽短大、地元自治体が一体となってイオンモール広島府中（ショッピングモール）で登録会を例年実施している。昨年度のドナー登録数は45人で（コロナ禍の）今年も22人だった。登録数としては多いが、前年から半減している。コロナ禍の影響を感じている。3つ目は香川県である。高松琴平電鉄琴平線で骨髄移植ラッピング電車を走らせていただいている。2車両1編成で10月末まで走る。香川県発行のプレスリリースも添付した。臓器移植も10月が推進月間なので「臓器移植ラッピング」も同時実施している。こうしたラッピング電車は初めて。多くの人が身近に（骨髄バンクに）触れてもらえるので大変ありがたい。過去5年の推進月間登録者数では10月は前月9月に比べ20～30%アップしており、1年を通じて登録最多月である。

（主な意見）

＜大久保＞ 10月は全国各地でボランティアや地区普及広報委員が中心となって色々な登録会やイベントを開催している。今年もコロナ禍の影響で例年と比べてどうか。

＜小島＞ 全国各地でドナー登録会やイベントが行われる。その中で規模の大きなイベントは当法人へ後援依頼が来る。申請をいただいて後援許可を出すと（先方の）ポスター等の後援欄に当法人名が記載される。依頼申請が例年は十数件あるが、今年も半減している。申請してこないということは中止になっていると思われる。申請があったイベントでも、後日中止になるものや無観客開催になるものがあると聞いている。

＜小寺＞ インパーソンのミーティングが減るのは今のご時世やむを得ない。広報渉外部としてはWEBなどでそれをカバーする、できれば挽回するくらいの意気込みでやってほしい。

（2）手紙交換WG進捗状況

小川移植調整部長兼新規事業部長が口頭で説明した。

手紙交換WGを改めて仕切り直し、残った課題を議論していくことを前回9月11日の業務執行会議で報告した。座長は橋本明子理事で、鈴木利治理事にもアドバイザーとして加わっていただいている。その後WGを2回、9月16日と10月7日に開催した。今回のWGは現場担当者の声を中心に意見を聞くことを目的としている。2回のWGで自由に意見を述べてもらった。1回目は手紙交換の意義について、2回目は渡す際に配慮すべき手紙の取り扱いについて意見交換した。次回は11月4日を予定している。実際の運用の見直しについて具体的に話す予定である。

（主な意見）

＜橋本＞ WGをどうしようかと一瞬考えて、何よりも現場でドナーや患者の手紙を扱っている人たちの実感を聞くのが一番良いだろうということでフリートークを重ねることを考えついた。鈴木理事にご陪席いただきながら進めた。一言でいえば、本当に皆様の声を聞いて良かった。これが骨髄バンクを支えている人たちなのだということをしみじみ感じた。直接対面はしないが、命を救うために参加してくれている重要な存在であるドナーの骨髄をいただいて、生きる戦いができたという気持ちを患者が手紙として渡すという基本は変わらない。それをこれからも続けて行く。ただこの30年間で最も変わったのは、SNSの発達である。そのために手紙の書き方に

よっては、相手を簡単に特定できてしまうということがある。厚労省も大変心配している。そのところは重々気をつけていただきながら、感謝の想いを伝え合いましょうということ、これからもうまく運べるように現場の人の声を聞いた。とにかく手紙はできれば渡したい。ドナー側にも受け取らせてあげたい。そこで「これはどうか」と思うような内容、例えば「亡くなりました」というようなことがあったら「それを渡しながら支えるのが私たちの仕事です」というドナーコーディネーターたちの声を聞きながら胸が熱くなるような時間を過ごしている。基本的には変わらないのだが、一つここは変えた方が良く思うことがあった。手紙交換は1年という規定がある。患者にとって移植から1年間というのは職場復帰する人も増えている。それだけに忙しい日々でゆっくり感謝の手紙を書く時間がとれないまま過ぎてしまう人もいるのではと思う。金森平和理事にお聞きしたい。

<金森> 移植前処置も軽くして早く職場復帰するという考えが一般的になってきている。時短など社会の理解もあって、半年から1年で早めに復帰される方も多い。忙しいという意味がちょっと分からないが、通院は1週間か2週間に1度はされると思うので、病院とのつながりは強い。その間に移植のコーディネーターも病院に配置されているので、手紙も含めて積極的にやっていただいた方がいいのではと思う。

<橋本> 慌ただしい中で、ゆっくり家族みんなで手紙を書く時間をとって書きましたというのを1年に限らず、2年にしてあげたいと思う。

<金森> そのような意味では（手紙交換の）期間は長い方が良く思う。

<橋本> 経験者からもそのような声が出ていて全体的に見直している。他の理事の方々からも手紙交換についてコメントがあれば生かしていきたい。

<浅野> ドナーがどなたかを本当は知りたいが、自分は今のままで良く思っている。

<小寺> 今までは2度のお手紙交換は1年以内ということになっていたのか。

<小川> 1年以内に2往復までである。

<橋本> 2往復までなのは良いかなと思うが、そのようなことで、小川部長も賛同の上でこの期間は緩めましょうかという話が出ている。患者とドナーが、会うことなくその後の人生を過ごして行くというのはバンクのやり方、一つの個性である。その上で気持ちの交流は美しくできるようにというのが狙いである。SNSで公開してしまうようなことがないようにしながらも、心のこもった手紙のやり取りがうまく運んでいけたら良い。先程も述べたが、フリートークに参加しているコーディネーションスタッフの方やバンク職員や関係者が「こんなに熱い気持ちで患者とドナーをつないでくれているのだな」と知ることができた。フリートークは皆さんにも聞いていただきたいと思うほど非常に活発である。時間が足りないと思うくらい、皆がこんなに熱い想いでドナーと患者を結ぶ仕事をしていると改めて感じた。それでも「この手紙の内容は（渡すべきか）どうしよう」と悩む現場の人もいるわけである。ちょっと書き込み過ぎている、逸脱しているという手紙もあるので、そのような場合でも誰かと相談しながら可能な限り届ける方向にしたい。

<鈴木> 現場の方の熱い想い、志をひしひしと感じた。せっかく書いてくださった手紙、とくに患者の書いてくださった手紙は1通も無駄にするべきではないということ、を前提として、それをいかにして円滑に進めるか。そのようなことに思った。もう一度フリートークがあって、その上で、何か現場が困ることがあれば、それを

バンク本体としてどのようにフォローすれば良いのか。このようなことについての結論を得ることができればと思っている。

<小寺> この会議はWEBか。

<橋本> 会議室に集まって対面である。

<小寺> 集まった現場のメンバーは、どの地域の人たちか。

<小川> 関東のドナーコーディネーター3人と関東地域のHCTC（移植コーディネーター）1人と事務局員である。

<小寺> 地方の方々の意見も聞けるのがWEB会議のメリットだ。地域によって多少考え方も違うかもしれないので、中央だけでなく地方の方々の考えも十分に吸収した上で決めて頂けたらと思う。

<橋本> 一定の結論が出た後も、こうした集まりはブロックごとでも良いし日本全体でも良いし、定期的に現場同士の語り合いや情報交換というのを続けるべきだと思う。

<小寺> 患者が亡くなってご遺族の方からお手紙が（ドナーへ）届くこともある。私の経験で、1990年前後にシアトルへ行った時、現地の男性ドナーと会う機会があった。その人がたまたま私に個人的に「実は私の患者は亡くなってしまったのだけれども、自分の骨髄が悪かったのだろうか」ということを言われた。お亡くなりになってドナーの方に（家族などからの）手紙を渡す場合は、ある程度支えが必要だ。そこを十分に考えて仕組みを作っておいた方が良い。

<橋本> 既に同じ経験をしているコーディネーターが参加していた。「一生懸命支える」そうである。提供したドナーはやはり衝撃を受けるが、だからこそ一緒に悔み、その患者が最後まで病気と戦うことができたことへのフォローもするということがあった。実際に拝見した「あなたのお陰で最後まで戦うことができました」という手紙でも（受け取ったドナーにとっては）おそらく一生の宝になるのではないのか。フォローの問題だと思う。

<小寺> フォローはコーディネーターが担うのか。

<橋本> 現状ではコーディネーターがやっている。今後どのように（ドナーを）支えて行くのか検討していく。

<折原> コーディネーターが、家族からの（患者が死亡した内容の）手紙に対してドナーがショックを受けた場合にケアもしていくということか。精神的なフォローもやっていくという考えで進むのか。

<橋本> 私一人の考えで進むわけではないが、そのような声もある。鈴木理事陪席のもとに皆で検討していく課題の一つと思う。

<折原> そうなるとコーディネーターの研修内容も変わってくる。

<小川> WGにはドナーコーディネータ部の吉川TLも参加しているので、ドナー側の立場の人も入っている。

<小寺> 2人の理事に座長とアドバイザーとしてWGに加わっていただいた。迅速に一つの行動指針を出して問題があれば適宜修正していくというスタンスで進めてほしい。

<金森> 血縁間の移植では医師、看護師を含めてそうした経験は非常に豊富である。血縁間では、既にフォローが行われている場合がある。（ドナーフォローに関する）勉強会を催すのであれば、そうした経験者を講師に呼んでもよいと思う。

<橋本> 近年の変化の一つは、HCTCが家族ドナーも非血縁も含めて現場でフォローしている。彼らの働きもぜひ依拠していきたい。

<小川> WGに参加したHCTCも「HCTCの立場として、ぜひそうしたフォローに関わっていききたい」と発言してくれた。また「これまでもドナーのサポートをしてきた。今後もしていきたい」と3人のコーディネーターから発言があった。

<折原> それは全コーディネーターの意見ではない。動揺している。

<小寺> これは動揺するような話ではない。コーディネーターの仕事が多忙なことは分かる。その時代その時代に応じて柔軟にやっていけば良い。もちろんドナー側の方々の意見も十分に聞いた上で、皆のコンセンサスが得られればそれで良い。

(3) 調整医師の新規申請・承認の報告

折原ドナーコーディネーター部長が資料に基づき説明した。

令和2年9月1日から10月1日に新たに申請・承認された調整医師の人数は1名、合計で1148名である。

(4) 寄付金報告

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

9月の寄付は件数758件、金額は1069万5805円をいただいている。4月から9月までの累計の件数は5027件、金額は6396万5511円をいただいている。9月の1か月間でいただいた大きな寄付として患者関係者から100万円、サントリービバレッジサービスの骨髄バンク支援自動販売機の半年の寄付金額158万5843円をいただいている。横浜市立大学病院や神奈川県立がんセンターに設置された自動販売機から多額の寄付をいただいている。

(主な意見)

<小寺> この厳しいご時世であるが、寄付をしてくださる方が大勢いて大変ありがたい。

(5) 移植件数報告

渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

4月から9月までの国内移植件数は514件、そのうち国内が511件、海外から国内へは2件、国内から海外へは1件である。4～9月の2020年度半期を終えて昨年度比マイナス107件。コロナ禍により4月以降8月まで件数が少なかったため現時点で107件のマイナスだが、9月が116件ということで、回復の兆しが出て来た。残りの半年間の動向を注意深く見ていきたい。9月末までの累計移植件数は2万4748件に達した。残り252件で2万5000件に達する。10～12月の数字によるが早ければ年内に2万5000件に達する可能性がある。

(主な意見)

<小寺> 9月になんとか盛り返した。この傾向が続くと良い。

(6) その他

小川移植調整部長兼新規事業部長が口頭で説明した。

WMDD(World Marrow Donner Day) 世界骨髄バンクドナーデーが毎年9月第3土曜日に設けられている。ホームページに各バンクの取り組みを紹介するページを設けている。当法人からは、著名人からの応援ビデオメッセージのURLを貼り、YouTubeで世界中の人が視聴できるようにした。

(主な意見)

- <小寺> アメリカとかドイツでも視聴できるということか。
- <小川> その通りである。日本語だけがワンクリックでYouTubeにつながる。
- <小寺> 英語の得意な加藤副理事長に英語版を作成してもらえたら良かった。
- <小川> 英語字幕を付ければよかったと思う。
- <小寺> (海外の方々が) 日本のことを皆知りたがっている。「お前のところは何だかうまくやっているじゃないか」というのが世界の日本に対する印象である。ただ日本語だけでは白けるので、今後は英語で紹介してほしい。

続けて小川移植調整部長兼新規事業部長が口頭で説明した。

WMDA (World Marrow Donor Association) 世界骨髄バンク機構から当法人は認定を受けている。WMDAの本拠地はオランダにある。欧州では2018年からGDPR (General Data Protection Regulation) という個人情報保護法が非常に厳しくなっている。WMDAから「この分厚い協定書を結んでくれ」と2018年から依頼されていた。国際弁護士に内容を見てもらい、理事長にサインをいただいた上で2020年7月に協定を結ぶことができた。

(主な意見)

- <小寺> これは当法人ホームページに載っているのか。
- <小川> 載っていない。
- <小寺> (協定書の中身は) 載せていけない内容か。
- <小川> 載せていけなくはないが、何十ページもあり全て英語なので見る人があまりいないと思う。
- <小寺> 載せること自体はそんなに難しいことではない。昨今、WEBを資料として使う方もいる。当法人が努力した証でもあるので載せた方が良いのではないか。
- <小川> 検討する。

続けて小寺理事長が口頭で説明した。

今日、急遽情報が入った凍結保存の件である。ドナーはコロナウイルスに感染していないので採取しても良いという。そこを確認してから前処置に入りたいという移植チームの要望がある。コロナに関する安全性を担保してからというのは、特別に審査して許可することである。非常に多く最近では100件を超えた。そのうち実際に移植したのは91件である。一番心配していたのはドナーのギフトオブライフ(骨髄)を患者の都合で使われなくなる、つまり捨ててしまうことが起こらないかという点だった。それで今までは(凍結に)ブレーキをかなりかけていた。今回使われなかった例は1件もなく、すべて使われた。非常に良かった。91件のなかで3件の生着不全があった。非血縁者間移植として

は決して悪い数字ではない。残念ながら今までも生着不全はあった。私自身が凍結審査しているが、採取した時間、元々の前処置に入る時間、新たに前処置に入る時間の差を見て、これは十分に使われるということ、「待てる患者」いうことを確認して許可している。今までは皆そのような人ばかりだった。凍結保存はしばらく続くと思う。3件の生着不全が起こった原因を確かめた方が良い。血縁間でも凍結保存は実施されている。血縁は採取してすぐに同じ施設で凍結保存するが、非血縁は少なくとも採取してから半日くらい経ってから（別の）移植施設で凍結保存される。採取してから凍結保存するまでのタイムラグで何か問題が起きるのでは、という懸念があった。そうした事態が実際に起こったかどうかという点を、医療委員会に理事会として諮問して特別に（3件を）調査したい。皆様ご異存はないか。半日のタイムラグが移植結果に影響しているとしたら、それを防ぐための施策を考えなければいけない。

(主な意見)

<加藤> ぜひ調査してほしい。当該3件だけではなく全件調査をしないと3件が長かったのかどうかわからない。

<小寺> 医療委員会の委員長が森先生であるので、森先生には前もってお願いしてある。「100件くらいになったら1度調べてみたい」とおっしゃっていた。私としては3件だけでも聞いておいた方がいいと思う。

<加藤> 採取してから運搬にどれくらいの時間がかかって、凍結が何時間後に行われたのか事務局で把握しているか。

<小川> 把握していない。採取施設と移植施設が距離的にどの程度離れているかは分かる。

<加藤> 3件から始めても構わない。しかし全例やらないと問題点が明確にならない。施設によって時間だけでなく、テクニックや慣れの差があると思う。3件のブリーフレポートを元に医療委員会で詳細を詰めていくという順番でいいと思う。

<小寺> 最終的に医療委員会の意見も聞こうと思う。諮問する点はご了解いただけるか。佐藤副理事長はよろしいか。

<佐藤> 結構である。

以 上